■吉野秀雄　　歌人。喘息と闘いながら研鑽に努め，<敗戦>直後のデビュー時には既に大家の風格，「晴陰集」で頂点。
よしのひでお
教科書疑獄・1902＝　　群馬県高崎市で，織物問屋会社吉野藤一郎の次男に生まれる。母はサダ。8人兄弟。

日露戦争終・1905＝ 3歳：

生来虚弱で，

伊藤博文暗殺1909＝ 7歳：富岡の祖父母の許に移り，富岡小学校に入学。

大逆事件判決1911＝ **9歳：**
明治天皇没・1912＝10歳：

21ヶ条要求・1915＝13歳：卒業。実家に戻り，高崎商業学校に入学。

長塚節と知人の国語教師から，正岡子規らについても教わり，

大暴落・・・1920＝**18歳：**卒業し，慶応義塾理財科予科に入学。
原敬首相暗殺1921＝19歳：
改組で，経済学部に進む。
関東大震災・1923＝21歳：**_根岸の子規庵を訪ね，遺妹の話を聞くなどして，感銘を受ける。**
護憲三派圧勝1924＝22歳：**_肺患にかかり喀血，中退して帰郷。病床で，正岡子規の作品・歌論を読むなどして，独習。**
治安維持法・1925＝23歳：**_会津八一の「南京新唱」を読んで傾倒，鎌倉七里ヶ浜の療養所に入り，退所後も鎌倉に住む。**
円本時代始・1926＝24歳：**_気管支性喘息を発病し,生涯の持病となる。会津八一に歌の解釈について手紙を出す。かねてよりの婚約者栗林はつと結婚，高崎に帰り，私家版「天井凝視」を刊行。**
金融恐慌・・1927＝25歳：静岡県伊東で療養。前橋の病院で痔ろう手術。退院後，連日呼吸困難が続く。
共産党事件・1928＝26歳：**_宮崎丈二の詩文雑誌{河}の同人となり，歌文を発表。**
世界恐慌・・1929＝**27歳：**男子誕生も夭折。**_肺炎起こして危篤。回復後，会津八一に作品を送って添削を乞う。長塚節の生家訪問。**
海軍軍縮条約1930＝28歳：出雲崎での良寛百年祭式典に列席し，遺跡を巡遊。
満州事変・・1931＝29歳：**_鎌倉に転地し，以後，定住。**

国際連盟脱退1933＝31歳：**_鎌倉来訪の会津八一と初対面，以後，しばしば東京の居宅を訪ねて師事。以後数年，実家の東京店に勤め，宣伝用月刊誌の発行に従事する一方，松岡静雄の許に通って，上代文学・言語学を学ぶ。**
二二六事件・1936＝34歳：**_私家版の歌集「苔徑集」を刊行，なお世に問うことを自制。米倉稔と毎月鎌倉短歌会を主催。**
日中戦争始・1937＝35歳：会津八一と上州旅行。田辺氏から，詩経・杜甫などの講義を聴く。
健保+総動員 1938＝**36歳：**
この間，2男2女を得るが，

日米開戦・・1941＝39歳：

年金+総武装 1944＝42歳：**_妻が死去。4児を抱えて，生活に窮する。詩人八木重吉の未亡人とみ子が家政婦となる。**
敗戦・・・・1945＝43歳：
新憲法公布・1946＝44歳：**_鎌倉アカデミアの文学部教授になり，学生に感銘を与える。良寛自筆歌稿「ふるさと」の釈文冊子を刊行。{新潟日報}の歌壇選者などして，かろうじて生活を維持。**
新憲法施行・1947＝**45歳：*{創元}創刊号に，妻が没する前後を詠んだ歌「短歌百余章」を発表，高い評価を受ける。「鹿鳴集歌解」。歌集「寒蝉集」を刊行，すでに大家の風で歌壇にデビュー。とみ子と再婚。歌集「早梅集」。**
朝鮮戦争始・1950＝48歳：鎌倉アカデミアが廃校となる。この前後，歌友らと，毎年のように，上信越や関西を旅行。
独立回復・・1951＝49歳：
ﾒｰﾃﾞｰ事件・ 1952＝50歳：父が死去。日本古典全書の「良寛歌集」を刊行。
TV放送始・・1953＝51歳：「短歌とは何か」を刊行。

国連加盟・・1956＝**54歳：**喀血し，療養。糖尿病を併発し，持病が増える。会津八一が死去。
なべ底不況・1957＝55歳：「良寛和尚の人と歌」を刊行。「会津八一全集」編纂委員の一人となる。
ｲﾝｽﾀﾝﾄﾗｰﾒﾝ・1958＝56歳：妻の先夫のため，「定本八木重吉詩集」を編纂し刊行。***頂点を極める「晴陰集」含む「吉野秀雄歌集」で，**
美智子妃・・1959＝57歳：**_読売文学賞。**
安保闘争・・1960＝58歳：文庫版「吉野秀雄歌集」，「実朝・西行・良寛」を刊行。**_テレビ・ラジオ放送にしばしば出るようになるが，**

全国総合計画1962＝60歳：***喀血続き，糖尿病も悪化，リューマチ痛もひどく，闘病に終始。**
TV宇宙中継始1963＝61歳：以後2年半，{毎日新聞}夕刊に，随筆「心のふるさと」を連載。

大学紛争始・1965＝**63歳：**
いざなぎ景気1966＝64歳：随筆「やわらかな心」を刊行。**_しばしば呼吸困難に陥り，外出も稀になる。**
美濃部都知事1967＝65歳：**_ほとんど病床につき，第1回迢空賞受賞後，没した。**
多数の美術鑑賞，旅行記，随筆を残し，また書家としても第一級の境地を極めた。

「没年日本史人物事典」，平凡社百科事典，インターネット，